

幕末明治の写真師列伝 第五十七回 内田九一 その二十二

内田九一の肖像写真については先に述べた上野彦馬、飯岡仙之助と一緒に写っている写真の他に、「洋装姿で椅子に腰掛けて軽く右足を組んで、膝の上に帽子を持って一人で写っている」有名な写真がある。これが一番内田九一らしい肖像写真ではないだろうか。また、この他にも『月乃鏡』の「故内田九一先生」の項に掲載されている写真「故内田九一先生と其撮影に係はる幕兵の訓練」に九一の肖像写真が合成されたものが、『大阪写真百年史 大阪府写真師協会創立七十年誌』などに掲載されている。内田九一の肖像写真としては、他にも「黒い洋装姿の内田九一正面寄り」の写真がある。この肖像写真は写真百年祭の展覧会で、掛け軸に写真印刷されているものが一般にも展示されている。さらに、永見徳太郎『長崎の美術史』（夏江堂、昭和2年（1927））に掲載されている九一の妹の嫁ぎ先、品川家蔵の厚手のコートを着た内田九一の肖像写真もある。

内田九一は輸入した外国製レンズにわざわざ「内田」と刻印をして販売したという。このことは、『月乃鏡』所収、「故内田九一先生」の項に「先生果斷進取の資に富み常に率先して斯界の発達を図り、鏡玉数千個を海外に求めて自己の姓を刻せしめ一般の需要に便す（當時名入鏡玉を輸入して販売したるもの先生と大井ト新氏とあるのみ）」と書かれている。

大井ト新（注1）は安政5年（1858）に長崎に医学の勉強のために留学していて、その当時から写真術を研究している。そして、先輩の松本良順、上野彦馬、内田九一、阿部徳（亀谷徳次郎）（注2）等の写真家とも親交していた。この大井ト新は後年、新政府に仕えた後、実業界に転じ成功する。余談だが自由民権運動家の大井憲太郎はこの大井ト新と義兄弟の縁を結び高並姓を大井に変えている。

また、内田九一は、大阪時代もそうであったが、いち早く当時の有名な歌舞伎役者や吉原大黒楼（維新後は金瓶楼）の花魁今紫大夫、柳橋や新橋の人気芸者などの肖像写真を数多く撮影して、いわばプロマイド写真として販売し儲けていた。明治6年（1873）頃は、金龍山浅草寺の仁王門内左側の床店が内田九一撮影の役者の写真等を一手に扱う販売店で、写真一枚の値段が金十二銭五厘で当時としては大変高額であったという。この店はかつて歌舞伎役者でもあり歌舞伎座の役員も勤めた興行師・坂野久次郎の店で、この坂野久次郎は松本良順の今戸の別邸に出入りをしていたことから、やはり松本順（松本良順）の紹介で内田九一と知り合い、その写真の販売を任されるようになったものだろう。この坂野の金龍山浅草寺の仁王門内左側の床店は、社団法人霞会館資料展示委員会編『鹿鳴館秘蔵写真帖』（平凡社、1997年）の「30浅草寺 仁王門と二尊仏（二尊仏現存）」という写真をよく見ると判るが、写真の左下に「寫眞」と読めることから、この二尊仏のすぐ近くにあったと思われる。

坂野久次郎は、壮年時代は紀の國屋半十郎という役者で、助高屋高助の弟子となって澤村と名乗っていた。その後、役者をやめてからは番頭となり、京橋の中橋に澤村座を経営している。また、明治12年頃には本郷の春木座の衰退を回復させ、晩年は歌舞伎座の役員を勤め、積善翁と称していた。

内田九一が市川團十郎、尾上菊五郎、澤村田之助、澤村訥升、岩井半四郎、中村芝翫などの当時人気の歌舞伎役者たちの名刺判

写真を撮影できたのは、この松本順と坂野久次郎の人脈によるのであろう。特に尾上菊五郎は内田九一と懇意にしていたようで、尾上菊五郎自身も内田九一の浅草大代地の写真館で、写真師に扮した写真などを撮っている。また、阿部豊編『五世尾上菊五郎』（「五世尾上菊五郎」刊行會、1935年）を見ると、背景に書割が写っている内田九一撮影の尾上菊五郎の写真が数多く掲載されていて興味深い。

また、この床店とは別にもう一軒、内田九一の弟子で今津正次郎（政次郎）（注3）の「松林堂」という店があり、そこでも内田九一の俳優写真を販売していた。この「松林堂」は、大森亮潮『浅草人情地図』（朝日出版社、昭和53年）の巻末付録、大正10年10月28日、共栄堂発行の『浅草公園及附近観世音由来吉原遊郭一覽』という地図によれば、浅草公園六区、今のひさご通り沿いの「石川バー」のあった場所で、ここは後に「ナミキ化粧店」となった場所（千束町2丁目20番地の24）にあった。また、今津正次郎（政次郎）は明治21年に武州北吉見の百穴穴居址の撮影をした人で、これは考古写真としても知られて、写真の門人には鹿島清兵衛（注4）がいる。

注1：大井ト新

天保五年三月紀州領十津川に生る。大阪及京都にて蘭医に就て修行し、長崎に留学、医学を学んだ。維新後官途に就いたが致仕して工業薬品兼機械貿易業を営んだ。写真レンズを輸入し、その文字入レンズが内田九一の輸入レンズと共に名高いものである。写真術は松本良順、上野彦馬、内田九一及び外人等に就いて学んだ。後実業界に雄飛した。大正十三年五月十一日長逝、享年九一。（梅本貞雄編『日本写真界の物故功労者顕彰録』（日本写真協会、昭和27年）より）

注2：阿部徳（亀谷徳次郎）

長崎木下町唐物扱役亀谷家の養子。蘭館に出入りし写真術を学び、また上野彦馬にも就いた。文久年間、長女とよと共に京師に上り、知恩院境内の茶屋の傍らに仮写場を設けた。後長崎に帰郷、長崎木下町に写場を開いた。明治七年金星観測団に加入、金星を撮影した。明治十七年ロシア領ウラジオストックに病没、享年五十九。（梅本貞雄編『日本写真界の物故功労者顕彰録』（日本写真協会、昭和27年）より）

注3：今津正次郎（政次郎）

明治初年、浅草の写真師。俳優写真舗を開いた。明治二十一年武州北吉見の百穴穴居址を撮影し、考古写真として知られる。門人に鹿島清兵衛がいる。（梅本貞雄編『日本写真界の物故功労者顕彰録』（日本写真協会、昭和27年）より）

注4：鹿島清兵衛

大阪鹿島家の人。東京新川鹿島家の養嗣。湿板時代今津正次郎に写真術を学ぶ。バルトン氏と共に写真団体を結成し、小西浅沼より欧米の機械材料を多数輸入し、写真術の進上発達にアマチュア写真団体の創設者として最大の貢献を為した。乾板会社への投資、大幻灯会、写真会の開催、玄鹿館経営等、その生涯は愛妻名妓ぼん太の哀話と共に絵巻物の如く多彩である。大正十三年八月七日逝去、享年五十九。（梅本貞雄編『日本写真界の物故功労者顕彰録』（日本写真協会、昭和27年）より）（森重和雄）